



対話的学びの試み —私の授業改革

高林 秀明

今年度、春学期開講の「地域福祉論Ⅰ」の講義において、“ある工夫”を取り入れた。200人程度の講義には慣れてはいるが、今年度は280人となり、初回の講義で私語が気になったこと、そして使用するテキストの内容がやや難解であったので、学生の授業理解を助けるための工夫が欲しいと考えたからである。

“ある工夫”とは、平凡なことかもしれないが、授業の最後に全員に書いてもらう出席カードを兼ねたコメントカード（学んだこと・質問を書くための用紙）の活用である。毎回、280人のコメントの中から10～15人分を選んでパソコン（ワード）に打ち込む。その際、多様な意見を選び、関連するコメントは分類して並び換え、それぞれのコメントの最後に学生の学科名・学年・性別を記す。分量はA4用紙に2枚程度になる。それを印刷して次の講義で配布して読み上げ、最初の20・30分間で感想・意見に解説を加え、質問に答えるというものである。

現在まで毎回欠かさずに続ける中で、最大の効果だと思うのは、学生がお互いのコメントを読むことで、同じクラスで学ぶ人たちが授業内容をどのように理解したのか、どのような意見や疑問を持ったのかを共有できることである。「みんなの意見を読んで、今まで考えたことのない視点を学んだ」あるいは「他の人の感想を聞いたり、取り入れることによって、社会の見方や考え方が変わってく

ると思った」などと多くの学生から好評を得ている。二部（夜間）でも開講している同じ講義の社会人学生からは、労働と生活の経験に根ざした、具体的かつ深みのある意見が多く、彼らのコメントは昼間の学生たちにも紹介している。コメントだけでなく中間と期末のレポートも優れたものを全員に配布して解説する（春学期の期末レポートは秋学期の最初の講義にて）。書きっ放しにならないので学生は自分自身の理解の程度と今後の学習課題を把握することができるのではないかと思う。

その上、この工夫の効果として、他の学生のコメントに刺激されて、次第に学生個々の記述量が増え、それに伴ってコメントの質も全体的に高まっている。ある学生は自らのアルバイトの実態を、何人かの学生はひとり親家庭で育った経験や生活保護世帯として暮らしてきた思いを、そして障がいのあるきょうだいのことを、授業内容に関連づけて書いてくれた。無着成恭編『山びこ学校』（岩波文庫）の「生活綴方実践」が一つの理想であり、それには到底及ばないが、学生たちが社会福祉の課題を現実の自らの生活（将来の労働や社会保障）と結びつけて考える姿勢も少しずつ育ってきているように思う。

私は、次第に学生に学習内容を伝える力強さは教員の言葉よりも学生のコメントの方にあると思うようになった。学ぶという目的のもとで学生同士の関係は対等・平等だからではないか。一方、教員が学生に対して権威的な態度を取っていなくても、学生は教員に対してこちらが思う以上に距離を感じている。だから、私は、授業の問題の所在は、学生の側にはなく、教員の授業技術以上に、教育の場における民主主義の遅れや教員自身の権威主義といった根深いところにあると考えるようになった。もちろん私の課題として、で

ある。

ともあれ、講義室の雰囲気はポジティブになり、たとえば学生たちは講義の最初にコメントをまとめたプリントを受け取るとさっそく真剣な眼差しで読み始める。その姿をみるとうれしくなる。お互いのコメントを読みながら、振り返りのために30分をかけても足りないくらいである。そこで思うのは、効率的に「教師が学生に理解させる」のではなく、学生たちは「誰もが理解できる力を持っている」と考え、じっくり取り組む方がいい。理解という日本語よりも、understand（アンダースタンド）という言葉の方がイメージしやすい。語源にかまわず曲解になるが、人は自分自身が立っている地の下は隠れていて見えないので、「他人が土を耕している姿（考え学ぶ姿）」を見ることを通して自分自身の考えを知り、そして新たな思考を形成しているのではないだろうか。教育の場、そして講義においては、学生が対等・平等な他者との間主観の相互作用、すなわち対話の中で理解する／学ぶことを経験し、そしてその楽しさと喜びを感じるものが何よりも大切なことだと思う。

ところで、春学期の末に、「地域福祉論Ⅰ」において、独自に作成した授業評価アンケートを実施した。結果は学習内容の理解についての項目は概ね満足できるレベルであったが、私語への対応等の授業運営については手厳しい指摘もあり反省させられた。

夏期休業に入り、沖縄大学の『地域研究所年報』に宇井純氏が書かれた「学生による授業評価の一例」を見つけ、驚嘆した。それは、宇井氏が沖縄大学で担当する「公害論」等の講義において実施した学生による授業評価報告とそれに対する講評であり、年報発行は1990年度、講義は1988年度分であり、24年も前の先駆的で赤裸々な教育実践の告白であっ

た。「情熱」「クラスの学生との関係」「講義内容の質と量」などの評価項目の中で、面白いと思ったのは「教師が学生をいらだたせたり、気をちらせたりするような癖があれば挙げてください」という質問である。ある学生は「(法学部1年)先生は『沖縄の人は…』と言う口クセがあるので直してほしい。沖縄の人は、物事をはっきり言われるということに慣れていないと僕は思うから」と書いた。それに対して宇井氏は、正直に「まだ沖縄の歴史が身につけていない。戦前、戦後の歴史の理解が頭の中で止まっている感じは自分でもわかる。…」と答えている。宇井氏は、授業評価を試みて、「大勢の(学生の)目で見るというのはおそろしいほど思いあたるふしがある」「この調査を行った事によって教師の自分が講義を客観的に見ることができるとは間違いない」、そして「本学の教師諸賢も真剣に検討されることを希望する」と述べている。

私は宇井氏の自省的で前向きな教育実践に励まされて、春学期の「地域福祉論Ⅰ」で独自に行った授業評価を集計し、秋学期の「地域福祉論Ⅱ」の最初の講義において評価結果と講評を思いきって配ってみた。学生の反応は「授業評価の結果を返してくれた先生ははじめてです。」「私語の対応は先生だけの責任ではなく学生同士が注意し合うことが必要だと思う」などと予想以上のものであった。

私は教師としての教育法の訓練を受けたことがなく、教授法も授業技術も乏しい。だからなのだろう、平凡な工夫であっても高い教育効果を感じた。対話的学びの試みは始まったばかりであり、学生からの意見や批判は喜んで受けたい。そして、その声を学生に返してお互いに共有しながら、より深い対話的学びのための工夫を求めていきたい。

(本研究所研究員 地域福祉・社会保障)